

# 自閉症スペクトラム児における協力行為獲得のための指導

—「お菓子作り」場面を通して—

○中川 真悠子  
(埼玉県立春日部特別支援学校)

小野里 美帆  
(文教大学教育学部)

KEY WORDS: 自閉症スペクトラム児 協力行為 共同行為ルーティン

## I. はじめに

ASD 児は、「心の理論」における障害 (Baron-Cohenら, 1985) により、相手の意図と自分の意図を調節し、協同活動を行うことの困難性が指摘されている (Tomasello, 2005)。典型発達児の場合「人と何かを協力する力」は乳児期から発達していく (Tomasello, 2005)。一方、ASD 児の場合、他者の意図理解における困難さが、協力行為の獲得における困難さに影響を及ぼしていることが指摘されている。生涯発達を考慮すると、「人と協力する」という行為の獲得を支援していく必要がある。しかしながら、幼児や児童期の ASD 児を対象とした指導研究は散見されるが、中学生の ASD 児に対する指導研究はほとんど見当たらない。そこで本研究では、日常生活場面を利用した指導を通して、中学生の ASD 児における他者との協力行為の獲得を検討し、指導可能性について明らかにすることを目的とする。

## II. 方法

**1. 対象児:** 男児 1 名 (CA12:04)。ASD 児。MA6:06、IQ51 (田中ビネー式知能検査 V)。語い年齢 8:02 (PVT-R)。カードゲーム等ルールが明確なゲームは他者と共に遊ぶことができるが、他者と物事を共有して従事するよりも、1 人で作業を行ってしまうことが多かった。特に、協同で遊んでも、作業に夢中になると、他者の声かけにも反応することがなく、全て 1 人で行ってしまいう傾向があった。

**2. 指導期間及び場所:** 7 ヶ月間。対象児の自宅にて、90 分間の指導を 8 回実施。

**3. 指導場面:** MT と対象児が共同で遂行する「お菓子作り」ルーティン場面を設定した。お菓子作りは、飾り用の生クリームをミキサーで作る (以下、「ミキサー場面」)、ウエハースで生クリーム、チョコ等のトッピングを用いて「お菓子の家」などの構成を行い、その後、摂食をするという活動である。ミキサー場面において、ミキサーを扱っている MT が、「肩が疲れた」等の「困った発言」を行った際に、対象児は何等かの援助行動を行うことを指導する。

**4. 指導目標及び設定の理由:** 協力行為の獲得を目的とする。「ミキサー場面」の標的行動は、対象児が MT に対して、援助となる行動や相手を気にかける反応をすることとした。他者の「困った発言」に対し、対象児の反応の有無を観察することで、他者の意図理解が成立しているか判断しやすいと考えた。

**5. 指導手続き:** 1) ベースライン (B.L)。2) 指導期: MT は対象児の行動に応じて段階的にプロンプトを提示した。①表情・つぶやき、②間接的表現 (「肩が疲れたな」)、③間接的言語 (「困ったな」)、④抽象的言語 (「助けて」)、⑤直接的言語 (手伝って) の 5 段階とした。対象児の援助行動に対するプロンプトは、①遅延、②促進、③モデリングの 3 段階とした。3) 般化: 「紙コプター作成場面」、「ホットケーキ作り場面」を設定した。プロンプトの提示は行わなかった。

**6. 分析方法:** VTR をもとにプロトコルを起し、対象児の援助行動を、①他者に声かけ (例、「僕がやるよ」) をして交代、②適切でない反応だが交代 (例、無言で MT が持

つのみキサーをつかむ)、③他者を気にかける反応 (例、MT の発言後、MT を注視)、④反応なしの 4 段階に分類し、セッション毎に変化を検討した。

## III. 結果及び考察

### 1. 指導場面の变化

B.L では、MT による困った発言に対し、援助行動はほとんど生起せず、MT への注視頻度も少なかった。指導期になると、MT の「代わってくれるの?」という問いに対し、「はい」と応答して交代するなど、MT への注視と共に、援助行動が生起するようになった。指導後半になると、MT が操作する道具を注視しながらミキサーと一緒に持つ等の、援助反応を行う行動が生起するようになった。

### 2. 家庭での变化

母親が困ったような発言を何気なくつぶやいたとき、対象児はそれに見合った援助行動を行うようになった (例、母親「(探し物中) 困ったなあ」→児「まかせろ! (一緒に探す)」)。この変化に母親は、「自分から気付くのは難しいが、耳を傾けることや周りが意識できるようになった」と語っていた。また、対象児が通うデイサービスにおいても、泣いていた子の近くに行き、「大丈夫か?」と声をかけるなど、他者を気にかける様子も観察されている。

### 3. まとめ

今回の指導を通して、対象児は、他者の困った発言を受け、相手の状況を確認し、援助行動を行うという過程及びその般化が認められた。このことは、①他者の意図を状況から推測すること、②①に基づいた援助行動が獲得されたことを示唆する。先行研究では、事前にビデオを対象児に見せ、援助行動を 1 つに限定して教示する (松岡, 2000) ことが多い傾向にある。本研究では、モデルとなるビデオを用いず、援助行動を定型的な 1 つの行動パターンとして教示しなかったにも関わらず、様々な状況での般化が可能になった。要因として、状況から推察させるという指導方法が有効であったこと、それにより、限定した状況ではあるが、援助行動の前提となる「相手の意図の推測」そのものを促進した可能性があること、援助行動の「動機づけ」を支援することができた可能性が考えられる。本研究を通して、支援手続きの工夫により、協力行為の教育可能性が示されたといえる。

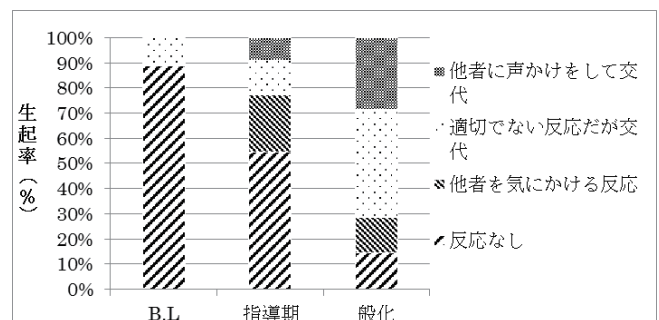


Fig.1 A児における援助行動の表出形態

(NAKAGAWA Mayuko・ONOZATO Miho)